

感情表出の制御と精神的不適応との関連 —生物学的パーソナリティ要因と環境的要因の比較検討—

Emotional expression regulation and psychological maladaptation:
Comparative analyses of biological personality and environmental factors

師岡 美里
跡見学園女子大学人文科学研究科
臨床心理学専攻
Misato Morooka
Graduate School of Humanities,
Division of Clinical Psychology,
Atomi University

中野 敬子
跡見学園女子大学
Keiko Nakano
Atomi University

要 約

本研究は現代青年の感情表出の制御と精神的不適応の関連を明らかにするとともに、生物学的パーソナリティ要因である動機づけシステム(行動抑制システム: BIS / 行動賦活システム: BAS)と環境的要因である親の養育態度(養護/過保護)が感情表出の制御に与える影響について検討することが目的であった。女子大学生($N=234$)を対象とし、動機づけシステムと親の養育態度を独立変数とした重回帰分析を行なった結果、BISが感情表出の制御に影響を及ぼすことが示された。さらに、BISとBASを高群/低群に分け、独立変数とした二元配置分散分析の結果では、交互作用に有意差があるものもあったが、BISの高群において、感情表出の制御を行う傾向が高くなることが認められた。動機づけシステム、親の養育態度、感情表出の制御のスタイルが精神的不適応へ及ぼす影響を説明する「感情表出の制御の精神的不適応モデル」を検証する共分散構造分析の結果では、親の養育態度の過保護により精神的不適応が高まることは示されたが、感情表出の制御および動機づけシステムの影響は統計的に有意ではなかった。本研究結果は、感情表出の制御の精神的不適応への影響は少なく、動機づけシステムや親の養育態度が感情表出の制御にある程度の影響を及ぼすことを指摘した。

【Key Words】感情表出の制御, 精神的不適応, 動機づけシステム, BIS/BAS, 親の養育態度(養護/過保護)

I 問題と目的

感情表出の制御とは、社会的場面において、経験した感情をそのまま表さず、強めたり、弱めたり、他の感情に置き換えたり

して、本来とは異なる形に表すことである(崔・新井, 1999)。状況に応じて適切に感情表出の制御を行うことができないと、他者との関係性が悪化したり、精神的不適応に陥ったりする可能性がある。感情の表出

を上手に制御することは、他者との関わりを避けることができない社会生活において重要であるといえる。

現代青年の対人関係の特徴として、自分自身の内面を開示するような関わり方を回避し、表面的な楽しさの中で群れる一方で、互いを傷つけないように、互いの内面に踏み込まないように気を遣う関わり方が指摘されている(岡田, 2002)。青年期における人間関係の悩みとしては、「心からすべて話せる友人がいない。」「大学で本当に心を許せる友人が少なく、時々孤独を感じる。」が上位に挙げられている(高井, 2008)。青年期は、自己意識の高まりと共に、他者からの評価に過敏になる時期でもある。現代青年の広い交友関係を目にすると、外的に適応し、良好な人間関係を築いているように見える。しかし、その裏では自分が傷つきたくないあるいは周囲の人間に嫌われたくないために、自分の感情を抑制している可能性がある。そのため、現代の青年は感情表出の制御を適切に行うことができず、対人的疎外感(対人的関わりの中で生じる孤独感や不信感)を感じやすいと考えられる。そこで、本研究では、現代青年の感情表出の制御と精神的不適応との関連を検討する。

自分の意見を否定されたとき、怒りを感じたとする、その場ですぐに言い返す人もいれば、納得できなくても取りあえず相手に合わせる人、まずどうして自分の意見が否定されなければいけないのか、その理由を尋ねる人もいるだろう。このように、同じ状況で、同じ感情が生じたとしても、感情表出の仕方が人によって異なることは容易に想像できる。感情表出の仕方が人に

よって異なるのは、感情が生起するきっかけになった出来事や自身の感情、場面に対する認知や思考、それによる反応の仕方が異なるからである。感情表出の制御の仕方は、人によって多様であるが、個人の中では、ある一貫したパターン(特徴、性質)があると考えられる。これらのことから、その人を特徴づけている持続的で一貫した行動パターンであるパーソナリティが感情表出の制御と関連していると考えられる。

Eysenk は、人間の行動を説明するためのパーソナリティの次元に生物学的な基盤を求めた。パブロフの条件付けや実験神経症の研究を参考にして、脳機能を基盤とした生物学的パーソナリティ理論という研究領域を確立し、生物学と心理学を繋ぐ実証可能な仮説を数多く生み出している(高橋ら, 2007; 高橋・繁耕, 2008; 丹野, 2003)。パーソナリティの次元には、情緒安定性(情緒安定—不安定)と向性(外向性—内向性)の2つの次元を決める生物学的な要因があり、情緒安定性は自律神経系の安定性によって、向性は、大脳皮質神経の興奮・制止過程の特徴によって決まる(丹野, 2003)。Eysenk の理論を発展させた Gray (1982)は、情緒不安定が強いと、報酬・罰へのいずれかの感受性が強くなり、情緒が安定すると感受性は低くなると考え、これを強化感受性理論と呼んだ。強化感受性モデルでは、人間の行動は2つの動機づけシステムの競合によって制御されていると考えられ、行動抑制システム(BIS: Behavioral Inhibition System)と行動賦活システム(BAS: Behavioral Activation System)の2つのシステムを定義している。BISは、行動を起こす際の恐怖になる要因である

罰、無報酬の信号、新奇なものに対する無知からくる抑制の信号などの罰刺激を受けて活性化され、進行中の行動を抑制したり、目的志向から始まった活動を変化させたりする。BASは、行動を起こそうとする要因である報酬、罰からの解放を知らせる条件刺激を受けて活性化され、自らが望む目的に向かう行動を賦活する。BISは、不安などのネガティブな情動を、BASは、喜び等のポジティブな情動を産出するシステムである(上出・大坊, 2005; 安田・佐藤, 2002)。両者は独立した神経システムに支えられており、BISは主に中隔・海馬システムへ投射されるセロトニン神経、BASは中脳の腹側被蓋野から側坐核へ投射されるドーパミン作動性神経が中心的な役割を担うとされる(Gray, 1982; Depue & Collins, 1999)。BIS、BASと脳機能を基盤とした神経システムの関係については、双生児法による行動遺伝学的解析により、それぞれ独自の遺伝学的要因が寄与していることが明らかにされている(高橋ら, 2007)。安田・佐藤(2002)は「両者は動的な均衡関係を維持する限り、環境への適応が促進されるが、両者のバランスが崩れたとき、行動ならびに情動の調整に障害が生じる」としている。高橋ら(2007)では、Cloningerの気質と性格の7次元モデルに基づいて開発されたTemperament and Character Inventory(TCI)の損害回避、新奇性追求とBIS/BASの相関関係を算出した結果、BISと損害回避、神経症傾向との間に強い相関、外向性との間に中程度の相関、BASと新奇性追求、外向性との間に中程度の相関が見られることが明らかにされている。そこで、本研究では、感情表出の制御の生

物学的パーソナリティ要因として、脳機能を基盤とする生物学的パーソナリティ理論に基づいた、行動抑制システム(BIS)と行動賦活システム(BAS)に焦点を当てる。

子どもにとって家族は、出生後最初に出会う他者であり、家族の行動を観察し、モデリングすることを通じて次第に基礎的な社会的スキルを獲得すると考えられている(青木ら, 2008)。子どもは世話をしてくれる家族との関わりの中で、社会的にも心理的にも成長していくため、家族との関わりは、社会的スキルの獲得にとって重要である。特に母親は、家族のなかでも子どもと接する時間が長く、愛着の対象となることが多い。Bowlbyによると、愛着とは、特定の人との間に形成される情緒的な絆のことである。Bowlbyは、愛着理論の中で、内的作業モデル(IWM: internal working model)とは、「人や世界との継続的なやりとりを通じて構築される世界、他者、自己、そして自分にとっての重要な他者との関係性に対する表象である。」と定義している(加藤, 2012)。愛着は、子どもが安心できるような関係性を養育者との間で築くことによって育まれるため、養育者の養育態度の質が問われる。そのため、母親が子どもに対してどのような関わりをしたかという事実よりも、子どもが親の養育態度をどのように認識しているかが重要である。島(2014)では、親から養護を受けたという認知がIWMの回避に、親が過保護であったという認知がIWMの不安に影響し、内的作業モデルが個人的・社会的適応に影響することが明らかにされている。また、粕谷ら(2000)は、安定型得点の高いタイプのIWMを持つ者は社会的スキルが高くなり、

アンビヴァレントかつ回避型得点の高い IWM を持つ者は社会的スキルが低くなる傾向があることを報告している。社会的スキルは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動であるとされている(相川, 2009)。以上のことから、愛着と社会的スキルの一つであると考えられる感情表出の制御には関係があると推察される。そこで、本研究では、感情表出の制御の環境的要因として、親の養育態度の認知に焦点を当てる。

感情表出の制御の要因を検討する上で、認知発達の観点や、社会発達の観点に焦点を当てた研究がなされている。しかし、生物学的パーソナリティ要因や環境的要因については、あまり研究されていない。本研究の第一の目的は、現代青年の感情表出の制御が精神的不適応へどのような影響を及ぼしているかについて検討することである。第二の目的は、行動抑制システムと行動賦活システム(BIS/BAS)による生物学的パーソナリティ要因と親の養育態度による環境的要因が感情表出の制御にどのような影響を及ぼしているかについて検証することであった。本研究は感情表出の制御の規定因について、生物学的パーソナリティや環境要因といったこれまで明らかにされて来なかった側面から検討することで、新たな知見が得られるという学術的意義があると考えられる。また、感情表出の制御を適切に行えないために精神的不適応に陥っている人への支援の仕方の一助になるという意味で臨床的意義があると考えられる。

II 方法

1. 対象者と手続き

女子大学生234名(平均年齢=18.54, $SD = .81$)に対し質問紙調査を行った。回答は無記名で任意で行われた。

2. 評価材料

1) 新版感情表出の制御尺度(崔・新井, 1999)

具体的な場면을提示しないで各自の自由な想定ができ、感情表出の制御の傾向を測定できる尺度である。「八方美人的感情表出の制御」、「非仲間志向的感情表出の制御」、「自己抑圧的感情表出の制御」、「同調のための抑制的制御」、「同調のための強調的制御」の5つの下位尺度があり、21の質問項目、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらでもない」、「多少あてはまる」、「あてはまる」の5件法で構成されている尺度である。

2) BIS/BAS 尺度 (Behavioral Inhibition System/ Behavioral Activation System; 安田・佐藤, 2002)

BISには、「懸念・罰感受性」、「回避ドライブ」、「抑制性」、BASには、「接近ドライブ」、「報酬応答性」、「新たな報酬体験の追求」の6つの下位尺度があり、30項目、「当てはまらない」、「やや当てはまらない」、「やや当てはまる」、「当てはまる」の4件法で構成されている尺度である。

3) 日本語版 PBI(Parental Bonding Instrument; 竹内, 1989)

16歳までに経験した親の養育態度を測定する尺度であり、日本語版のPBIである。本研究では母親の養育態度に限定して尋ね

た。「過保護」,「養護」の2つの下位尺度があり, 25項目,「全く違う」,「違う」,「その通りだ」,「全くその通りだ」の4件法で構成されている尺度である。

4) 対人的疎外感(杉浦, 2000)

対人的関わりの中で生ずる孤独感および不信感を測定する尺度であり, 21項目,「あてはまらない」,「あまりあてはまらない」,「どちらともいえない」,「ややあてはまる」,「あてはまる」の5件法で構成されている。

5) 日本語版 HSCL(Hopkins Symptom Checklist; Nakano & Kitamura, 2001)

精神身体症状を測定する5つの下位尺度のうち「心身症状(13項目)」,「抑うつ症状(14項目)」を用いた。「ぜんぜんない」,「たまにある」,「時々ある」,「たびたびある」の4件法の尺度である。

III 結果

1. 新版感情表出の制御と各変数の相関関係

新版感情表出の制御(八方美人的感情表出の制御, 非仲間志向的感情表出の制御, 自己抑圧的感情表出の制御, 同調のための抑制的感情表出の制御, 同調のための強調的感情表出の制御), 生物学的パーソナリティ要因(BIS, BAS), 環境的要因(過保護, 養護), 精神的不適応(対人的疎外感, 心身症状, 抑うつ症状), それぞれの変数の関係を見るためにピアソンの積率相関分析を行った。結果を Table. 1 に示す。

八方美人的感情表出の制御においては, 懸念・罰感受性, 抑制性, BIS, 報酬応答性との間に低い正の相関が認められた。回避ドライブ, 接近ドライブとの間にはほぼ

Table. 1 新版感情表出の制御と各変数の相関関係

変数	M	(SD)	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 八方美人的感情表出の制御	18.2	(4.31)	—							
2. 非仲間志向的感情表出の制御	9.12	(3.60)	.15*	—						
3. 自己抑圧的感情表出の制御	13.4	(3.91)	.53**	.02	—					
4. 同調のための抑制的感情表出の制御	11.8	(3.12)	.56**	.19**	.44**	—				
5. 同調のための強調的感情表出の制御	4.47	(2.08)	.36**	.31**	.17**	.40**	—			
6. 懸念・罰感受性	18.7	(3.47)	.20**	-.03	.20**	.12	.10	—		
7. 回避ドライブ	14.5	(3.12)	.17*	.01	.13	.11	.14*	.52**	—	
8. 抑制性	14.8	(2.83)	.23**	-.02	.24**	.18**	.16*	.57**	.54**	—
9. BIS	48	(7.85)	.24**	-.01	.23**	.16*	.16*	.85**	.82**	.83**
10. 接近ドライブ	8.87	(2.52)	.19**	.11	.08	-.02	.08	.19**	.17**	.11
11. 報酬応答性	14.6	(2.82)	.20**	-.17**	.09	-.01	.03	.25**	.12	.19**
12. 新たな報酬体験の追求	12.4	(3.21)	.07	-.08	.02	-.06	-.05	-.07	-.09	-.17**
13. BAS	35.9	(6.79)	.19**	-.07	.08	-.04	.02	.14*	.07	.04
14. 養護	33.9	(4.06)	.10	-.15*	.10	.09	.02	.04	-.07	.09
15. 過保護	28.4	(2.85)	-.03	.19**	.00	.03	.06	.03	.03	-.11
16. 対人的疎外感	55.8	(11.47)	.10	.30**	.05	.15*	.19**	.31**	.21**	.16*
17. 心身症状	25.3	(7.76)	.06	.11	.05	.01	.09	.24**	.11	.08
18. 抑うつ症状	26.1	(8.09)	.11	.16*	.02	.14*	.19**	.36**	.31**	.20**

** $p < .01$, * $p < .05$

相関が認められなかった。非仲間志向的感情表出の制御においては、対人的疎外感と低い正の相関が認められた。報酬応答性、養護、過保護、抑うつ症状との間にはほぼ相関が認められなかった。自己抑圧的感情表出の制御においては、懸念・罰感受性、抑制性、BIS との間に低い正の相関が認められた。同調のための抑制的感情表出の制御においては、抑制性、BIS、対人的疎外感、抑うつ症状との間にはほぼ相関が認められなかった。同調のための強調的感情表出の制御においては、回避ドライブ、抑制性、BIS、対人的疎外感との間にはほぼ相関が認められなかった。

2. 重回帰分析

1) BIS/BAS と PBI の重回帰分析

動機づけシステムと親の養育態度の感情表出の制御への影響を検討するために重回帰分析を行った。新版感情表出の制御尺度の下位尺度である「八方美人的感情表出の制御」、「非仲間の志向的制御」、「自己抑圧的感情表出の制御」、「同調のための抑制的感情表出の制御」、「同調のための強調的感情表出の制御」、を従属変数とし、BIS/

BAS 尺度の2つの下位尺度(「BIS」「BAS」)、日本語版 PBI の2つの下位尺度(「養護」、「過保護」)を独立変数とした、5つの重回帰分析を行った。八方美人的感情表出の制御を従属変数とした分析($R^2=.082$, $F [2/231]=10.3$, $p<.001$)では、「BIS」の分散が5.6%、「BAS」の分散が2.6%、合計で8.2%の分散を説明した。非仲間志向的感情表出の制御を従属変数とした分析($R^2=.036$, $F [1/232]=8.74$, $p<.01$)では、「過保護」が3.6%の分散を説明した。自己抑圧的感情表出の制御を従属変数とした分析($R^2=.051$, $F [1/232]=12.35$, $p<.001$)では、「BIS」が5.1%の分散を説明した。同調のための抑制的感情表出の制御を従属変数とした分析($R^2=.026$, $F [1/232]=6.23$, $p<.05$)では、「BIS」が2.6%の分散を説明した。同調のための強調的感情表出の制御を従属変数とした分析($R^2=.024$, $F [1/232]=5.74$, $p<.05$)では、「BIS」が2.4%の分散を説明した(Table. 2)。

2) 精神的不適応の重回帰分析

感情表出の制御の精神的不適応への影響を検討するために、重回帰分析を行った。対人的疎外感尺度、日本語版 HSCL の下

Table. 2 BIS/BAS と PBI の重回帰分析

説明変数	八方美人 $R^2=.082$		非仲間志向 $R^2=.036$		自己抑圧 $R^2=.051$		同調のための抑制 $R^2=.026$		同調のための強調 $R^2=.024$	
	β	t	β	t	β	t	β	t	β	t
BIS	.219	3.46***	—	—	.225	3.51***	.162	2.50*	.155	2.40*
BAS	.162	2.56*	—	—	—	—	—	—	—	—
養護	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
過保護	—	—	.190	2.96**	—	—	—	—	—	—

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

Note. 八方美人 = 八方美人的感情表出の制御；非仲間志向 = 非仲間志向的感情表出の制御；自己抑圧 = 自己抑圧的感情表出の制御；同調のための抑制 = 同調のための抑制的感情表出の制御；同調のための強調 = 同調のための強調的感情表出の制御

Table. 3 対人的疎外感を従属変数とした分析

独立変数	β	t 値	有意水準
非仲間志向的 感情表出の制御	.296	4.72	< .001

($R^2 = .088$, $F [1/232] = 22.30$, $p < .001$)

位尺度である「抑うつ症状」, 「心身症状」を従属変数, 新感情表出の制御尺度の5つの下位尺度(「八方美人的感情表出の制御」「非仲間志向的制御」「自己抑圧的感情表出の制御」「同調のための抑制的感情表出の制御」「同調のための強調的感情表出の制御」)を独立変数とした3つの重回帰分析を行った。対人的疎外感を従属変数とした分析では, 「非仲間志向的感情表出の制御」が8.8%の分散を説明した(Table. 3)。心身症状, 抑うつ症状を従属変数とした分析では, 統計的に有意な結果は得られなかった。

3. 二元配置分散分析

感情表出の制御において, 行動抑制システム(BIS)と行動賦活システム(BAS)がどのように影響を及ぼすかを分析するために, 感情表出の制御尺度の5つの下位尺度である(「八方美人的感情表出の制御」「非仲間志向的感情表出の制御」「自己抑圧的感情表出の制御」「同調のための抑制的感情表出の制御」「同調のための強調的感情表出の制御」)を従属変数, BISの平均値を基に, BISの合計得点が18~47点である対象者をBIS低群, 48~64点である対象者をBIS高群, BASの平均値を基に, BASの合計得点が18~35点である対象者をBAS低群, 36~54点である対象者をBAS高群に分け, 独立変数とし, 二元配置分散分析を行った。

1) 八方美人的感情表出の制御の分析

八方美人的感情表出を従属変数とした分析では, BASの主効果には有意な差が見られなかったが, BIS($F=9.76$, $df=1/230$, $p < .01$)の主効果には有意な差が見られ, BIS高群が低群に比較して八方美人的感情表出を多く用いていた。交互作用($F=4.63$, $df=1/230$, $p < .05$)は有意な差が得られ, 単純主効果の検定を行った。BISの単純主効果($F=9.76$, $df=1/230$, $p < .01$), BAS高群におけるBISの単純主効果($F=12.51$, $df=1/230$, $p < .001$), BIS高群におけるBASの単純主効果($F=7.67$, $df=1/230$, $p < .01$)に有意な差が見られた。BIS群はBAS群に比較して八方美人的感情表出の制御多く用いており, BIS, BASともに高得点の人が八方美人的感情表出の制御を他の対象者と比較して多く用いていることが示された。

2) 非仲間志向的感情表出の制御の分析

非仲間志向的感情表出の制御を従属変数とした分析では, BIS, BASの主効果に有意な差は見られなかった。交互作用($F=4.57$, $df=1/230$, $p < .05$)は有意な差が得られたが, 単純主効果の検定では, BIS, BASいずれにおいても有意な結果が得られなかった。

3) 自己抑圧的感情表出の制御の分析

自己抑圧的感情表出の制御を従属変数とした分析では, BASの主効果には有意な

Table. 4 二元配置分散分析 F 値

変数	BIS 高群		BIS 低群		BIS	BAS	交互作用 <i>F</i>
	BAS 高群 (<i>n</i> = 52)	BAS 低群 (<i>n</i> = 58)	BAS 高群 (<i>n</i> = 51)	BAS 低群 (<i>n</i> = 73)			
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)			
八方美人的感情表出の制御	20.23 (3.89)	18.02 (4.44)	17.31 (4.16)	17.48 (4.20)	9.76**	3.43	4.63*
非仲間志向的感情表出の制御	9.42 (4.12)	8.67 (3.39)	8.45 (3.25)	9.73 (3.56)	.01	.31	4.57*
同調のための強制的感情表出の制御	14.12 (4.23)	13.78 (3.90)	12.94 (3.69)	12.78 (3.79)	4.44*	.24	.03
自己抑圧的感情表出の制御	12.67 (3.03)	11.90 (3.47)	10.86 (2.62)	11.64 (3.08)	6.43*	.00	3.67
同調のための抑制的感情表出の制御	5.04 (2.39)	4.41 (2.04)	3.96 (2.01)	4.48 (1.86)	3.44	.04	4.39*

***p* < .01, **p* < .05

差が見られなかったが、BISの主効果($F = 4.44$, $df = 1/230$, $p < .05$)に有意な差が見られBIS高群が低群に比較して自己抑圧的感情表出を多く用いていた。交互作用は有意な差が得られなかった。

4) 同調のための抑制的感情表出の制御分析

同調のための抑制的感情表出の制御を従属変数とした分析では、BASの主効果には有意な差が見られなかったが、BISの主効果($F = 6.43$, $df = 1/230$, $p < .05$)に有意な差が見られ、BIS高群が低群に比較して抑制的感情表出を多く用いていた。交互作用は有意な差が得られなかった。

5) 同調のための強制的感情表出の制御分析

同調のための強制的感情表出の制御を従属変数とした分析では、BIS、BASの主効果に有意な差が見られなかった。交互作用($F = 4.39$, $df = 1/230$, $p < .05$)は有意な差が得られた。単純主効果の検定では、BAS高群におけるBISの単純主効果($F = 7.00$,

$df = 1/230$, $p < .01$)に有意な差が見られ、BIS、BASともに高得点の人が同調のための強制的感情表出の制御を他の対象者と比較して多く用いていることが示された。(Table. 4)。

4. 共分散構造分析

動機づけシステム、親の養育態度、感情表出の制御のスタイルが精神的不適応へ及ぼす影響を説明する「感情表出の制御の精神的不適応モデル」を検証する目的で、動機づけシステムの2つの下位尺度、親の養育態度の2つの下位尺度、新版感情表出の制御の5つの下位尺度、精神的不適応(対人的疎外感、心身症状、抑うつ症状)を変数として、共分散構造分析を行った。その結果、新版感情表出の制御の5つの下位尺度を用いたモデルでは、モデルの適合度が低く、モデルを採択することが出来なかった。新版感情表出の制御の下位尺度には、強制的な感情表出の制御と抑制的な感情表出の制御が混在していたため、感情表出の

制御の中でも、強調的な制御(八方美人的感情表出の制御, 同調のための強調的感情表出の制御)を行っているものと抑制的な制御(自己抑圧的感情表出の制御, 同調のための抑制的感情表出の制御)を行っているものとに分けて、再度、共分散構造分析を行った。

1) 強調的制御の対人的疎外感への影響

強調的制御の対人的疎外感への影響モデルを検証する共分散構造分析の結果、適合度指標は GFI=.97, NFI=.90, CFI=.93, RMSEA=.085と適切な値を示し、このモデルを採択することとした(Figure. 1)。潜在・観測変数間においては、0.01%の危険水準で、親の養育態度から対人的疎外感へ負の影響(-.62)が示された。しかし、動機づけシステムから親の養育態度、強調的制御、対人的疎外感への標準化推定値は統計的に有意ではなかった。さらに、親の養育態度から強調的制御への標準化推定値および強調的制御から対人的疎外感への標準化推定値においても統計的に有意な結果は

得られなかった。

2) 強調的制御の心身症状への影響

強調的制御の心身症状への影響モデルを検証する共分散構造分析の結果、適合度指標は、GFI=.98, NFI=.91, CFI=.95, RMSEA=.062と適切な値を示し、このモデルを採択することとした(Figure. 2)。潜在・観測変数間においては、0.1%の危険水準で親の養育態度から心身症状へ負の影響(-.55)が示された。しかし、動機づけシステムから親の養育態度、強調的制御、心身症状への標準化推定値は統計的に有意ではなかった。さらに、親の養育態度から強調的制御への標準化推定値および強調的制御から心身症状への標準化推定値においても統計的に有意な結果は得られなかった。

3) 強調的制御の抑うつ症状への影響

強調的制御の抑うつ症状への影響モデルを検証する共分散構造分析の結果、適合度指標は、GFI=.97, NFI=.89, CFI=.92, RMSEA=.087と適切な値を示し、このモデルを採択することとした(Figure. 3)。

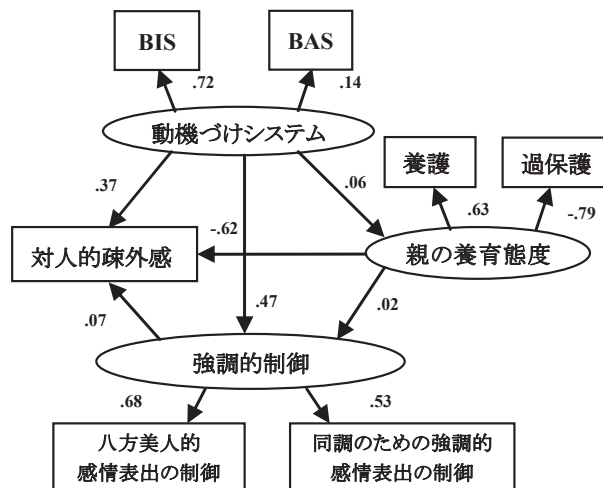


Figure 1 強調的制御の対人的疎外感への影響モデル

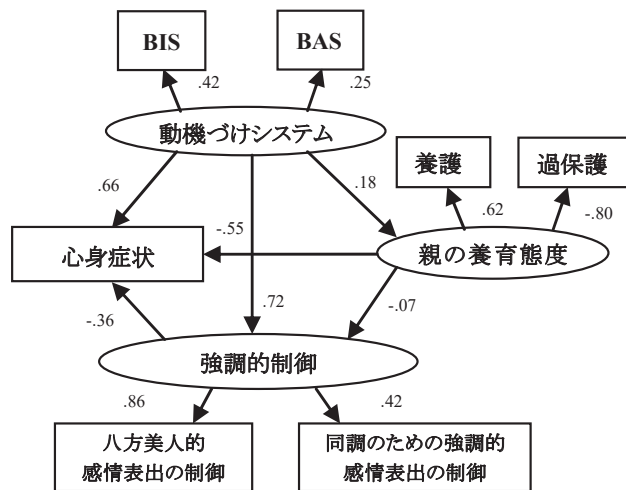


Figure 2 強調的制御の心身症状への影響モデル

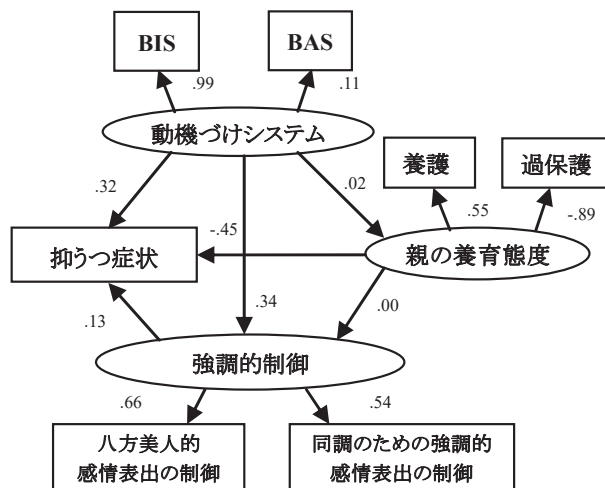


Figure 3 強調的制御の抑うつ症状への影響モデル

潜在・観測変数間においては、0.01%の危険水準で親の養育態度から抑うつ症状へ負の影響(-.45)が示された。しかし、動機づけシステムから親の養育態度、強調的制御、抑うつ症状への標準化推定値は統計的に有意ではなかった。さらに、親の養育態度から強調的制御への標準化推定値および強調的制御から抑うつ症状への標準化推定値においても統計的に有意な結果は得られ

なかった。

4) 抑制的制御の心身症状への影響

抑制的制御の心身症状への影響モデルを検証する共分散構造分析の結果、適合度指標は、GFI=.98, NFI=.90, CFI=.94, RMSEA=.069と適切な値を示し、このモデルを採択することとした(Figure. 4)。潜在・観測変数間においては、0.01%の危険水準で親の養育態度から心身症状へ負の影響

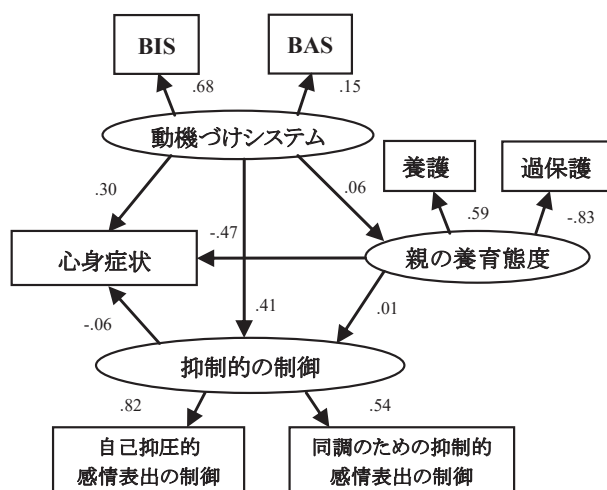


Figure 4 抑制的制御の心身症状への影響モデル

(-.47)が示された。しかし、動機づけシステムから親の養育態度、抑制的制御、心身症状への標準化推定値は統計的に有意ではなかった。さらに、親の養育態度から抑制的制御への標準化推定値および抑制的制御から心身症状への標準化推定値においても統計的に有意な結果は得られなかった。抑制的制御の対人的疎外感と抑うつ症状への影響モデルの検証も行ったが、統計的に有意な結果は得られなかった。

IV 考察

本研究の目的は、現代青年の感情表出の制御が精神的不適応へどのような影響を及ぼしているかについて検討すること、生物学的パーソナリティ要因と環境的要因が感情表出の制御にどのような影響を及ぼしているかについて検証することであった。まず、新版感情表出の制御尺度の5つの下位尺度を従属変数とし、BIS、BAS、養護、過保護を独立変数とした、5つの重回帰分析を行った。八方美人的感情表出の制御

は、BIS、BAS両方の影響を受けていることが示された。八方美人的感情表出の制御は、友人と仲よく付き合おうとする内容の制御である。BIS、BASどちらの影響も受けているのは、友人との関係性が崩れることを避けたいという気持ちと、友人と仲良くなりたいという気持ちの両方を持っているためであると考えられる。自分の感情が友人の感情と異なっていることは関係性維持にあたって不利であるため罰と捉え、一方で、友人がどのように感じているかを知る機会という意味で報酬と捉えていると推察される。自己抑圧的感情表出の制御、同調のための抑制的感情表出の制御、同調のための強調的感情表出の制御は、BISの影響を受けていることが示された。この3つの感情表出の制御は順に、友人に対して感じているネガティブな感情を表さない、友人と異なる感情を表さない、友人と同じくらいの強さで感情を表す内容の制御である。この3つの制御は、友人との関係性が崩れることを回避するための感情表出の制

御であると考えられる。根底に、友人との関係性が崩れることへの不安や恐怖がある。そのため、友人の感情と異なる感情が生じた場面を罰と捉えていると推察される。

非仲間志向的感情表出の制御は、過保護の影響を受けていることが示された。非仲間志向的感情表出の制御は、友人に対し、自分が持つネガティブな感情を実際より強く表し、ポジティブな感情を表さない内容の制御である。島(2014)では、親が過保護であるという認知は子どもに自律性や主体性を阻害されたという感覚を持たせるとされている。また、自分を信頼することも、自分が信頼される存在であると信じることもできなくなると考えられている。そのため、過保護に育てられると非仲間志向的感情表出の制御を行う傾向が高くなり、人を不快にさせるような感情表出を行うと推察される。親の養育態度が影響を及ぼしているのは、非仲間志向的感情表出の制御のみであった。これは、非仲間志向的感情表出の制御を除く4つの制御は、母親との関係の中で形成された制御ではないことを示唆していると考えられる。

次に、精神的不適応の3つの尺度を従属変数とした重回帰分析を行った。八方美人的感情表出の制御、自己抑圧的感情表出の制御、同調のための抑制的感情表出の制御、同調のための強調的感情表出の制御はBISの影響を受けており、ネガティブな感情が活性化していると考えられたが、非仲間志向的感情表出の制御のみが対人的疎外感に影響を及ぼしていることが示された。非仲間志向的感情表出の制御以外の4つの感情表出の制御は、相手に合わせて感情表出の制御を行うことで、結果的に友人との

関係性が維持されているため、精神的不適応に陥ることはなかったと考えられる。一方、非仲間志向的感情表出の制御は、相手に合わせることなく、常に相手の友人にネガティブな感情を表現するため、結果的に友人と関係を築くことができず、対人的疎外感を感じると考えられる。

感情表出の制御において、行動抑制システム(BIS)と行動賦活システム(BAS)の働きにどの程度の相違が見られるか詳細に検討するために、感情表出の制御尺度の5つの下位尺度を従属変数、BIS低群と高群、BAS低群と高群とを独立変数とし、二元配置分散分析を行った。八方美人的感情表出の制御では、BISが活性化するほど八方美人的制御を行う傾向が高くなること、BASが活性化している群においてBISが活性化するほど八方美人的制御を行う傾向が高くなること、BISが活性化している群においてBASが活性化するほど八方美人的制御を行う傾向が高くなることが示された。自己抑圧的感情表出の制御、同調のための強調的感情表出の制御では、BISが活性化するほど、自己抑圧的感情表出の制御を行う傾向が高くなることが示された。同調のための強調的感情表出の制御では、BASが活性化している群において、BISが活性化するほど、同調のための強調的感情表出の制御を行う傾向が高くなることが示された。非仲間志向的感情表出の制御は、BIS、BASの高群/低群に差が見られなかった。これは、重回帰分析の結果からも言えるように、非仲間志向的感情表出の制御は親の養育態度の過保護の影響を受けているためであると考えられる。その他の4つの制御の結果からは、行動抑制システ

ムが強く働く人ほど、感情表出を制御する傾向が高いと言えるだろう。

最後に、動機づけシステム、親の養育態度、感情表出の制御のスタイルが精神的不適応へ及ぼす影響を分析するために共分散構造分析によるモデルの検証を行った。強調的制御の対人的疎外感への影響モデルでは、親の養育態度を養護と認知し、過保護と認知していないことが、対人的疎外感を低めることが示された。強調的制御の心身症状への影響モデルでも、親の養育態度を養護と認知し、過保護と認知していないことが、対人的疎外感を低めることが示された。強調的制御の抑うつ症状への影響モデルでは、親の養育態度を養護と認知し、過保護と認知していないことが、抑うつ症状を低めることが示された。抑制的制御の心身症状への影響モデルでは、親の養育態度を養護と認知し、過保護と認知していないことが、心身症状を低めることが示された。

強調的制御の対人的疎外感への影響モデル、強調的制御の心身症状への影響モデル、強調的制御の抑うつ症状への影響モデル、抑制的制御の心身症状への影響モデル、いずれのモデルにおいても、感情表出の制御の精神的不適応への影響については、統計的に有意な結果が得られなかった。これは、重回帰分析の部分でも述べたが、感情表出の制御によって関係性が維持できているからであると考えられる。さらに、動機づけシステムの感情表出の制御および精神的不適応への影響についても、統計的に有意な結果が得られなかった。

本研究の結果、感情表出の制御が精神的不適応にさほど影響を及ぼさないことを指摘した。これは、本研究の対象者が比較的

健康度の高い学生であり、適応的に感情表出の制御を行うことができているためであると考えられる。また、動機づけシステム、親の養育態度が、ある程度、感情表出の制御に影響をもたらしていることが分かった。先行研究では、感情表出の制御が動機や場面の影響や友人との関係性の中で形成される部分もあると指摘されている。今後の研究では、他の要因との比較検討や最新の研究の知見も合わせて検討する必要がある。さらに、本研究の対象者は女子大学生であったが、男性も対象とした研究を行うことも感情表出の制御について明らかにするために必要であるといえる。

〈付記〉本研究は跡見学園女子大学倫理委員会において厳正な審査を受け、承認を得た上で行なっている。

文献

- 相川充(2009). 新版人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学—, セレクション社会心理学—20. サイエンス社
- 青木多寿子・谷口弘一・竹嶋飛鳥・戸田真弓(2008). 両親の養育態度が中学生の社会的スキルおよび生活充実感に及ぼす影響, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 57, 27-33.
- 崔京姫・新井邦二郎(1999). 新版感情表出の制御尺度の作成, 筑波大学心理学研究, 21, 89-97.
- Depue, R. A. & Collins, P. F. (1999). Neurobiology of the structure of personality: Dopamine, facilitation of incentive motivation, and extraversion. *Behavioral and Brain Sciences*, 22 (3), 491-

- 517.
- Gray, J. A. (1982). *The neuropsychology of anxiety*. New York: Oxford University Press.
- 上出寛子・大坊郁夫(2005). 日本語版 BIS/BAS 尺度の作成. 対人社会心理学研究, 5, 49-58.
- 粕谷貴志・菅原正和(2000). 中学生の内的作業モデルとソーシャルスキルの関連について. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 10, 91-98.
- 加藤邦子(2010). 新時代の保育双書 実践・発達心理学, みらい, 37-50.
- Nakano, K. & Kitamura, T. (2001). The relation of anger subcomponent of symptoms in Japanese and International student. *Japanese Psychological Research*, 43, 50-54.
- 岡田努(2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究, 10(2), 69-84.
- 島義弘(2014). 親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか: 内的作業モデルの媒介効果. 発達心理学研究, 25, 3, 260-267
- 杉浦健(2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達の変化—. 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 高橋雄介・繁枡算男(2008). 罰の回避と報酬への接近の感受性を測定する3尺度の比較. パーソナリティ研究, 17(1), 72-81.
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁枡算男・大野裕・安藤寿康(2007). Grayの気質モデル—BIS/BAS尺度日本語版作成と双生児法による行動遺伝学的検討. パーソナリティ研究, 15(3), 276-289.
- 高井範子(2008). 青年期における人間関係の悩みに関する検討. 太成学院大学紀要, 10, 85-95
- 竹内美香・鈴木忠治・北村俊則(1989). 両親の養育態度に関する因子分析的研究. 周産期医学, 19, 6, 852-856.
- 丹野義彦(2003). 性格の心理—ビックフェイスと臨床からみたパーソナリティ—. コンパクト新心理学ライブラリ 5. サイエンス社
- 安田朝子・佐藤徳(2002). 行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討. 心理学研究, 73, 3, 234-242.